

互いの存在に感謝できる社会へ

| | |
|-----|---|
| 著者 | 舟木 譲 |
| 雑誌名 | エコノフォーラム |
| 号 | 27 |
| ページ | 64-64 |
| 発行年 | 2021-03 |
| URL | http://hdl.handle.net/10236/00029391 |

2020年
11月26日
木曜日

舟木 讓 教授（宗教哲学・キリスト教学） 互いの存在に感謝できる社会へ

だれもが想像しなかった「コロナ禍」という試練と不安、そして悲しみが今もなお世界全体を覆い、私たちがそれまで「常識」「当たり前」と考え、問い直すこともなかった日常の営みを変えざるを得ない事態が続いています。例えば、人と話す時には、距離を取り、マスクをし、可能な限り向かい合うことなく静かに発語することや、食事の際には、話をしないで少人数かつ短時間ですますことなどが、現在の「常識」で「見識」とみなされるようになりました。

他者と豊かで良い関係を築き、共に協力していくために不可欠であった交流や、時の共有に大きな制限が加えられ、そこから改めてこの社会や人間のあり方を根底から考え直す、新たな社会のあり方を早急に創造しなければならぬという、明確な答えのない大きな課題が私たちの

前に突如現れた感じがします。

この課題に対する答えのヒントが「旧約聖書」の創造神話に存在しています。創造神話では、神が土の塵から人（アダム）を創造したのち、「人が独りであるのは良くない。彼に合う助ける者を」との理由で様々な生き物を創造します。しかし、どの生き物も「助ける者」とはならず、最終的に、人のあばら骨からもう一人の人を創造され、その人が真の「助ける者」となります。ここで「助ける者」と翻訳されている言葉は、本来「向かい合う者」という意味で、「人格的な交わりができる者」というように考えられます。すなわち、私たち人間は、一人で生きるものではなく、人格的な交わりの中で初めて生きることが出来る存在であるということです。今回の状況下で、人と直接向かい合い、会話や食事も含め

た人格的な交わりが阻害されたことで、誰しもがそのことを実感することができたのではないだろうか。

それと共に、私たちは民族や国境も越えた多くの人々（普段は意識していない人々も含めて）の多様な働きに支えられて日常生活を維持できている、言い換えれば多くの人々によつて「生かされている」という事実にも、マスクやせっけんなどの物流が阻害された時、誰しもが気づいたと思います。

ここにこそ私たち人間とその人間によつて築かれ、維持されている社会の本質を理解する道があるのではないだろうか。それは、この社会・世界は多種多様な人々の働きによつて維持され、日常の生活を営むことが出来ているという、当たり前で端的な事実です。また同時に、その状況が様々な理由で（感染症・災害・

紛争等）で阻害されたとき、最初に大きな被害を被るのが社会的に弱い立場に置かれている人々であるということも改めて浮き彫りになりました。

今の試練を通して、改めて私たち人間は互いに支え、支えられながら「生かされている」存在であり、本来一人でもその存在がないがしろにされたときには、社会のどこかでひずみと悲しみが生まれる、という事実に誠実に、共に向かい合いたいと思います。そして、アフター・コロナ、ウイズ・コロナと呼ばれる、新たな社会を、真の優しさと共感に満ち、一人一人の存在が大切にされる社会に変えるために、私たちがなすべきこととなしうることを共に信頼をもつて探求し、実行していきましよう。